

## GCOE-SRC 研究員セミナー 第二回ミニ・カンファレンス報告 2011年7月23/24日 於：小樽

2011年7月23・24日の両日にわたり、スラブ研究センターに在籍する研究員を中心とするミニ・カンファレンスを行った（GCOEプログラム「境界研究の拠点形成」による支援を受けている）。会場は『小樽市生涯学習プラザ』というすばらしい施設を確保することができた。

このミニ・カンファレンスの原点は、研究領域も受けてきた教育もさまざまな研究員たちが、それぞれの境界を越えて研究交流をより活発にしようとする目的で毎月行っているGCOE-SRC研究員セミナーにさかのぼる。二日間の合宿形式のミニ・カンファレンス自体もすでに2011年2月に開催している（報告書は以下で読むことができる：

[http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group\\_05/achievements/files/20110620new\\_report.pdf](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_05/achievements/files/20110620new_report.pdf)）。二回目にあたる今回は、これまでの活動を踏まえたうえでどのような新しい展開を見せることができるかという、「継続」と「チャレンジ」への取り組みとなった。

個別報告のセッションでは、新年度から研究員セミナーに参加した高橋沙奈美・森下嘉之・左近幸村の各氏に報告をお願いすることで、新しいテーマの導入と紹介を試みた。それに加え、過去に研究員としてセンターの活動を支えてこられた青島陽子氏の参加によって、現在に至るまでの研究員の活動の継続性とながりが見えやすくなることを狙った。

ラウンド・テーブルでは、「地域を研究する／地域で研究する」という共通論題を設定した。これは、センターのなかで各研究員の研究領域に重なり合う部分が少ないという事情を、むしろ地域研究のこれまでのあり方とこれからの可能性を多面的に議論するための積極的なチャンスへととらえ返す試みであった。以下に、各報告とそれに続く議論の内容、そしてラウンド・テーブルの様態を報告する。



## 【セッションⅠ】

高橋氏の報告は、ポスト・スターリン期の教会建築保護運動を、国家やロシア民族のナショナリズムの文脈で語る従来の研究からいったん切り離し、民衆の日常的な文化的・社会的実践に位置づけて論じようとする野心的な試みであった。報告は、運動を支えた知識人・史跡修復愛好家の自伝や、教会建築の保護をおこなっていた団体の言説に焦点をあて、それらの運動を、ソ連の公式イデオロギーである「権威言説」に言葉の上ではのっとりながら、実践レベルですり抜けてゆくものとして捉えることを目指していた。ソヴィエト・ナショナリズムに回収されることのない、より日常的・実践的なロシア愛国主義の分析へ向かうため、「親密圏と公共圏の間であって、市民社会のようでありつつ、そうではない」ロシア特有の空間とされる *svoi* (身内、仲間内) という社会グループの概念が提案された。報告に続いて、越野剛氏によるコメントが行われた。そこで問われたのは、「権威言説」概念のソ連時代前期への適用可能性、北カフカースにおいておこなわれた史跡修復のもつ政治性、知識人層の史跡修復家と教会の信者ないし民衆との関係、ソヴィエト・ナショナリズムとロシア愛国主義の区分であった。



フロアからの質問・コメントは、大きく分けて三種類あった。もっとも話題が集中したのは概念の使用をめぐる問題であった。「権威言説」という概念の使い方については、バフチンによる意味づけとの違いも含め、いくつか質問がなされた。さらに「焦点は社会の状態とナショナリズムのどちらにあるのか」、「*svoi* は公共圏とはどう違うのか、愛国主義とナショナリズムの定義づけとその実態を示す必要があるのではないか」といった大きな問題にいたるまで議論が白熱した。次に話題となったのは、教会建築保護運動と「ツーリズム」との関係、すなわち「1960年代の国土開発に伴い、風土というものが新しい認識の対象として見出されていく中で、国内旅行のネットワークが形成されていった」ことと、教会建築を保護する *svoi* の形成のされ方との関係であった。その他には、歴史的文脈についての指摘がいくつか見られた。文化財としての教会建築保護における宗教性をめぐる質問

や、史跡の修復家（バラノフスキー）が逮捕・釈放され、自伝を出版するに至った背景を問う質問がこれに当たる。このように活発な討論を呼び起こした本報告は、その一部であるという博士論文の完成を期待させるものであった。

## 【セッションⅡ：ラウンド・テーブル】

今回のラウンド・テーブル「地域を研究する／地域で研究する」では、「地域研究」の上に生じている様々な溝を埋め、それに対する共通理解を築くことは可能か、またそのためには何が必要かについての討論が試みられた。

発表は、それぞれ異なるディシプリンから地域に向き合ってきた4人の研究者によって行われた。住家正芳氏は、司会の後藤正憲氏によって提示された地域研究の三つの型（地域主体型、ディシプリン先行型、地域＝ディシプリン型）に照らして、宗教社会学という自身のバックグラウンドをディシプリンを軸として地域を横断するディシプリン先行型と位置づけた。さらに、柳川啓一の「異説 宗教学序論」を引きながら、「宗教一般の理解」のために比較と類比を武器としてきた宗教学が抱えるもどかしさと困難を描き出した。そこから、宗教学の中核とされながらも等閑に付されている比較という方法論を避けないためには、それを「意識的に問題化」することが大切であるとした。つまり、重要なのは理論か地域研究かではなく、不可避的に使用する概念を、それぞれの立場から自覚的反省的に検討し続けることであるとした。

二人目の発表者である池直美氏はまず境界研究と地域研究の定義と自身の問題関心をそれぞれ示し、その後自身の研究のディシプリンとしての政治学と地域研究および境界研究とのかかわりについて考察した。そのうえで、韓国の福祉政治を考える際、政治家がグローバルに共有される政治概念や言説を公の場で使い始めた時に、比較という視点で韓国を位置づけることが可能になったとし、ディシプリンが持つタームは、地域研究あるいは境界研究における共通言語となりうることを提案した。

三人目の地田徹朗氏はまず「ユーラシア」という地域の可変性や重層性を指摘し、その例としてユーラシア大陸やイスラーム文化圏といったメガ・エリア、旧社会主義圏のようなマクロ・エリア、中央アジアのようなメゾ・エリア、境界を超える生活圈や経済圏、国民国家の領土、行動圏などがあるとしたうえで、どの地域概念を使うかはディシプリンによって大きく異なるとする。そのうえで「ユーラシア地域研究」とは、多様で可変的な「ユーラシア」という地域を対象とし、学際的な議論を行うひとつの「場」としてとらえるべきであるとし、学問体系としての地域研究は存在しないのではないかと問いかけた。

最後の発表者である星野真氏は自身の対象地域である中国を取り巻く研究競争の激化を

背景に、地域研究者の抱える問題点とあるべき方向性を示そうと試みた。氏はここで議論する「地域研究」を外国人による国外地域研究と定義したうえで、「連続一年以上の現地滞在経験がある」「現地の新聞・雑誌を定期的に読んでいる」など6つの点をクリアするものはすべて「地域研究者」として定義できるとした。そのうえで我々を地域研究者たらしめているこれら言語習得や現地情報の更新と、方法論の洗練化に対する適応の両立が大きな負担となっているため、研究アイデアでは学際的な知識からヒントを得る、あるいは「地域を全体としてとらえる」ことで新たな仮説を立てるなどの優位性を前面に出していくことが必要であり、また方法論においても相互補助的な共同研究を行うなどの工夫が必要であるとした。



報告を踏まえたコメンテーターとして最後に家田修氏が発言した。家田氏はディシプリンと地域研究の違いを報告者たちがどう認識しているのかを整理したうえで、日本人として相手を見ていることにより自覚的である必要があるとし、それによって対象を見ている自己を客観的に見ることができるとした。また、地域研究者を名乗る者たちからは強固で普遍的なものと捉えられがちないわゆる「ディシプリン」も、もともとはアメリカなど特定の地域で生まれた、多分に地域性を帯びたものだということに気が付く必要があるとした。さらに地域研究には実践的な解決が求められるとし、自分自身の関心に基づく基礎研究と、社会が必要としている知見を社会へ向けて提供していく応用研究の両方が必要であるとした。そして最後に、純粋なディシプリンはもはや存在しないのであり、ある宗教、ある地域を選んでいることがアイデンティティになりうるのだとし、地域研究とはそうしたなかで新たな分野を作り出す可能性を持つものだとして締めくくった。

全体討論では参加者全員が自らの研究史を振り返りつつ、ディシプリンとは何か、地域

研究とは何か、役に立つ研究であることは必須なのか、といったような論点から考察を示し、非常に活発な議論が繰り広げられた。今回のラウンド・テーブルでは地域研究者であることの困難の吐露というだけでなく、その可能性へ目を向けた前向きな発表・発言も多かったのが印象的であった。結論として「ディシプリンとしての地域研究」はないとしつつも、星野報告のように多くの地域研究者が知らずに身に付けてきた属性を明示し、それらを認めた上での生存戦略を（非常に実践的に）考えていくというやり方は、参加者に新鮮な印象を与えるものでもあった。

### 【セッションⅢ】

このセッションでは、「19世紀後半から20世紀前半のロシア・東欧における国家と社会」というテーマで、青島氏と森下氏が報告した。

青島報告は、ポーランド分割でロシア帝国が獲得した西部諸県の教育政策を中心に報告し、西部諸県で実施された教員養成政策が内地に逆輸入され、最終的に内地での「大改革」政策を形成していったのではないかという仮説を立て、統治政策が上からの同化政策ではなく緩やかに行われていたという近年のロシア帝国論の議論を踏まえながら検討した。

1860年代前半からの西部辺境地域の不安定化に対応して西部諸県で国民学校が設立され、同時に教師養成セミナリアが作られるが、そこでは教師がその地域の人々と同じ階級の出身者であるべきとする方針に従って養成が行われた。中でもモロジェチノでは、それまでの教員はポーランド貴族出身者が多かったが、ポーランド貴族の影響がその地域の正教徒農民に広がることを阻止することを目的に、同じ正教徒の農民出身の教師を養成する政策をとった。そして、後にモスクワやペテルブルグなどの内地にも教師セミナリアが設立されたが、そこでの教員資格の要件はモロジェチノのセミナリアでとられた方針に沿うものであり、辺境地域の教育政策が内地での政策実施のための実験場として機能したのではないかという指摘がなされた。会場からは、教育政策における省庁間対立の有無、教員資格の民族的要件、西部辺境地域の中での民族教育政策の多様性、教師の教育科目とナショナリズムの関係などの質問がなされ、本報告がもつさまざまな方向に発展しうる可能性を示していた。

森下報告は、戦後直後のチェコスロヴァキアにおける住宅政策について、戦後復興とチェコ人の入植政策との関係に着目しながら報告した。第二次大戦直後の所謂「第三共和国」期は、様々な社会体制の可能性が模索された時期であったが、チェコ政府が戦前と比べてどのような社会構想を掲げていたのかを明らかにすることを目的に、戦後の住宅政策構想を考察するというものである。戦後、300万人にも及ぶドイツ系住民を追放した後、共産党

主導の「入植局」がチェコ人をドイツとの国境地帯に入植させる政策をとったが、そこで  
の住宅政策には共産党系の若手アヴァンギャルド建築家の住宅構想が大きな影響を与えた。  
彼らは、戦前から共産党の影響を強く受け、機能主義的な大規模集合住宅による社会変革  
を訴えていた。つまり、戦前の個人や家族を重視するリベラリズムに基づいた住宅政策や  
社会政策を見直し、集団の利益を重視する立場から、大規模集合住宅をモデル住宅とし、  
そこに託児所や食堂を設けたり、また女性の家事負担を軽減させるために設備を充実させ  
るなど、社会化、集団化をベースにした管理型の住宅政策を進めた。このように、ドイツ  
系住民の追放に伴って新しいチェコスロヴァキア国民国家の建設が模索される中で、戦前  
の自由主義政策とは異なった管理型の大規模集合住宅を国境地帯に建設し、大量のチェコ  
人を入植させるという住宅政策が、戦後チェコの共産主義的な社会構想のひとつの実験場  
となっていたことが論じられた。会場からは、プラハなどの都市部の住宅事情や人口政策  
との関係、ドイツ人建築家の影響の有無、ロシア・ファクターはいつ入ったのか、またア  
ヴァンギャルド建築家たちはどのような社会ヴィジョンを持って狭い部屋で構成される集  
合住宅を建築したのか、といった質問が出され、報告者の斬新な切り口をめぐって活発な  
討論が行われた。



#### 【セッションⅣ】

最後のセッションでは、左近氏が「19世紀半ばから20世紀初頭にかけてのロシアの茶貿易：ロシア帝国と世界経済のかかわり」と題する研究報告を行なった。本報告は、19世紀半ばから20世紀初頭における中国の政治的経済的状況と国際関係の変化を踏まえて、ロシアの茶貿易の発展を時系列的に整理することを目的とした。先行研究では、ロシアの茶貿易に関して、19世紀半ばまでの露中関係に基づく研究が中心であった。それに対して本報告では、アヘン戦争、アロー戦争とその後の一連の条約に基づく開港がもたらした政治動向を視野に入れて、ロシアの茶の輸入経路の変化が明らかにされた。

具体的な時系列として、1860年代、70年代を第1期、1880年代から日露戦争までを第2期、日露戦争以降を第3期と区切り、報告が進められた。第1期に関しては、広東茶がロンドン経由で輸入されるようになり、キャプタの独占が崩れた背景が明らかにされた。第2期に関しては、オデッサとウラジオストクを結ぶ定期航路（義勇艦隊）の確立と中国茶市場からのイギリスの撤退がロシア茶貿易に与えた影響が明らかにされた。第3期に関しては、シベリア鉄道の完成によるウラジオストク経由での輸入ルートの確立、ロシア市場へのインド、セイロンの茶の進出などに検討が加えられた。

ロシアや中国のみならず、インド、セイロン、イギリスが関係する地域横断的なモノの流れを描き出す報告であったため、質疑応答では多岐にわたる観点からの質問が寄せられた。特に、茶に限らず当時代の物流、航路、輸送コストなどに関する詳しい説明を求める声があがった。さらに、列強の進出と茶貿易の関係や、茶がもたらした生活様式の変化、ヨーロッパにおける茶文化圏とコーヒー文化圏などについても議論が交わされた。



### 【全体のまとめ】

総じて、今回のミニ・カンファレンスではさまざまな局面で「継続」の重要性が実感された。報告・議論においては「たとえ異なる分野の報告であるからといって遠慮することなく、ただし自分の立場の限界も踏まえたうえで、何か生産的なコメントをする」という毎月の研究員セミナーで自然発生的にできあがっていったフォーマットが共有され、報告者・参加者双方にとって刺激となる議論が続いた。他者にかかれるために、自分の居場所に帰る、そうした行き来が頻繁になされたわけである。自分の立場を見直し、かつわかりやすく伝えるための拠り所として、さまざまなディシプリンの重要性も見直されることに

なった。こうして、27人という決して少なくない参加者数にもかかわらず、議論は全員を巻き込み、それぞれの研究の立ち位置を考え直すきっかけとなるものであった。

前回のミニ・カンファレンスの経験を踏まえたうえで、新たに「チャレンジ」した部分も多かった。まず、個別報告ではコメンテーターを設け、ディスカッションの時間を前回よりも大幅に増やしたが、これは議論が充実した一因であったと思われる。ラウンド・テーブルで地域研究のありかたを問題にするというのもいささか冒険的な企画ではあったが、結果的には、GCOE-SRC 研究員セミナー立ち上げ時に漠然と理想としていた議論のあり方のひとつの結晶をみたかのようにであった。また家田氏という、地域研究を長年にわたってリードしてきた研究者の参加によって、視点の多様性が確保されたことも言い添えておきたい。運営面では、今回は責任者に負担が集中したため、今回は三人で構成される実行委員会を設置した。宿泊施設・会議場・懇親会場、当日の運営など参加者にはおおむね好評であり、ここでも経験の蓄積と新たな試みがうまく融合したといえる。二回のミニ・カンファレンスともに、参加者のあいだに自分たちで会をつくっていくという思いの共有が感じられたことは、雰囲気をよく物語るものとして特記しておきたい。

継続なしにはチャレンジがありえず、逆にチャレンジせずには継続はできない。このことは今後のミニ・カンファレンスおよび研究員セミナーの方向性とも関わってくるのだが、ひとまずは、参加者がそれぞれの胸に抱いたであろう以上のような実感をもとに、今後どのように研究活動を発展させてゆくのか、ぜひ注目していただきたい。



(文責：井上暁子〔セッションⅠ〕、宮本万里〔セッションⅡ〕、花松泰倫〔セッションⅢ〕、  
奥山史亮〔セッションⅣ〕、瀧口順也・安達大輔〔執筆・編集責任〕)

## プログラム

7月23日(土)

**【セッションⅠ】** 13:30- 15:30

報告者：高橋 沙奈美

「文化遺産としての教会建築に対するイデオロギーと権威言説」

コメント：越野 剛 司会：小松 久恵

**【セッションⅡ：ラウンド・テーブル】** 16:00- 19:00

『地域を研究する／地域で研究する』

「地域研究と比較」 住家 正芳

「地域研究と境界」 池 直美

「地域研究とユーラシア」 地田 徹朗

「地域研究とアジア」 星野 真

討論：家田 修 司会：後藤 正憲

7月24日(日)

**【セッションⅢ：パネル】** 10:00- 12:30

『19世紀後半～20世紀前半のロシア・東欧における国家と社会』

報告者：青島 陽子

「1860年代前半ロシア帝国の西部諸県における教育政策と『大改革』」

報告者：森下 嘉之

「チェコスロヴァキア第三共和国(1945-1948)における住宅政策と建築家  
—戦後復興と入植政策との関係を中心に—」

司会・総括：瀧口 順也

**【セッションⅣ】** 14:00- 16:00

報告者：左近 幸村

「19世紀半ばから20世紀初頭にかけてのロシアの茶貿易：ロシア帝国と世界経済のかわり」

コメント：福田 宏 司会：安達 大輔